

# 太郎さんの縫い針

★  
看護職部門  
入選

【神奈川県・島野由紀子】

40年ほど前の4月、看護学校を卒業した私は内科病棟に配属された。何につけても自信がなく病棟の廊下をいたずらに浮遊する「新人看護婦」（その頃の呼称）であった。

先輩に叱咤（しつた）激励されながら少し慣れてきたその年の秋、大きな荷物とともに太郎さん（62歳）が入院してきた。末期の胃がんで、住んでいたアパートを引き払つての入院だった。家族を持たず、日用品の行商で生計を立ててきた人だった。無口で愚痴は言わず気の毒なくらい我慢強かった。痛みが強い時期もあったはずなのに、痛み止めを要求することは極めて少なかった。

やがて食べたものが胃を通過しなくなり、吐いて衣類を汚すことが多くなったが、太郎さんは体がつらくても自分で洗濯していた。汚れ物が多くなってきたある日「私に洗わせてください」と言うと、いつもは取り付くしまもなく断るのに素直に汚れ物を渡してくれた。そんなことが続いた後、太郎さんが

ふと病室の前で「これやるよ」と小さくて大ききの割には重い包みを私の手のひらにのせて、戸惑っているうちに行ってしまった。包みには絹針、木綿針、毛糸とじ針、ふとん針などがそれぞれ銀紙に包まれ、輪ゴムでグルグル巻きになっていた。太郎さんが商っていた品物であった。

冬の初めの寒い夜、太郎さんは独りで静かに空の向こうに旅立っていかれた。

やがて、私はその縫い針を持つて嫁ぎ、保健師として働くようになった。その針たちは私と夫と子どもたちの衣類のボタンを付け、かぎ裂きを縫い、給食袋を作るのに活躍した。太郎さんの針は保健師としての私を励まし成長させてくれた。胃がん検診の受診率向上に取り組んだときには、太郎さんが私の背中を強く押したような気がした。針を使うといつも未熟な看護師であったことをわびる気持ちになる。これからもこの針を大切にし、太郎さんを想い、慢心しちな自分を律していこうと思う。